

齋藤孝著「声に出して読みたい日本語」草思社、2001年9月18日刊を読む

身体をつくる日本語

●暗誦・朗誦文化の衰退



- 詩は、朗誦したり暗誦したりすることにこそ魅力がある。日本語を体得するという観点からすると、子どもの頃に名文と出会い、それを覚え、身体に染み込ませることは、その後の人生に莫大なプラスの効果を与える。意味を解釈したとしても、暗誦できていないとすれば、その詩や名文の威力は半減してしまう。
- 文章の意味はすぐにわからなくてもいい。長い人生のプロセスのなかで、ふと意味のわかる瞬間が訪れればいい。こうしたゆったりとした構えが、文化としての日本語を豊かにする。暗誦は、些末な知識の暗記とはまったく異なる文化的営為である。
- イギリスではシェイクスピアやバイロンが、フランスではラシーヌなどが、学校教育でも暗誦され、国民の共通の文化となっている。
- みなが共通の古典テキストを暗誦していることによって、ふだんのコミュニケーションにも奥行きが出てくる。何げない日常のやりとりのなかで、ふとシェイクスピアが引用されたり、ゲーテの言葉が引き合いに出されたりすることによって、日常の会話が深い文化・伝統につながり、豊かな意味が醸しだされる。
- 古い言葉遣いには、現代の日常的な言葉遣いにはない力強さがある。身体に深く染み込むような、あるいは身体に芯が通り、息が深くなるような力。
- 歴史のなかで吟味され生き抜いてきた名文、名文句。声に出して詠み上げてみると、そのリズムやテンポのよさが身体に染み込んでくる。たんに染み込むだけでなく、身体に活力を与える。たとえしみじみとしたものであっても、心の力につながっている。
- 深く息を吸い、朗々と声を出す息の文化が、身体を中心に息の道をつくる。こしはら腰^{こし}を据えるということも、横隔膜を下げて深く呼吸をすること抜きには意味をなさない。身体全体に息を通し、美しい響きを持った日本語を身体全体で味わうことは、ひとつの重要な身体文化の柱。
- 息の間を工夫してリズムや響きを楽しむように工夫することによって魅力が増してくる。
- 朗誦することによって、その文章やセリフをつくった人の身体のリズムやテンポを、私たちは自分の身体で味わうことができる。それだけでなく、こうした言葉を口ずさんで伝えてきた人々の身体をも引き継ぐことになる。世代や時代を超えた身体と身体とのあいだの文化の伝承が、こうした暗誦・朗誦を通しておこなわれる。
- 世代を超えた共通のテキストを持つことは、世代間の信頼関係を深める効果がある。自分が大切に思い暗誦しているものを、子どもや孫の世代が暗誦し身体に内在化させているとすれば、そこに信頼感や安心感が生まれる。それが古典のよさである。
- 明治生まれ以前の作者によってつくられたもの。風雪に耐えてきた実績を重んじる。明治までの日本人が持っていた感性や気概や美意識を直接感じやすくする。現代の七十代の人たちには、



かなりの程度、暗誦・朗誦文化が残っている。ふとした会話のなかに、論語や禅の言葉や俳句や和歌が差し込まれたりすることがある。そうした瞬間に感じるのは、知的文化の伝統という以上に、身体文化の伝統だ。言葉が身体に技となって身についている。それに大きな意味がある。そうした言葉が身体の内から発せられるときに、その人の存在感が増すように感じられる。身について技となっているかどうか。これが大きな分かれ目である。身についたものは、当人も知らないあいだに心身のあり方に影響を与えている。



●最高の文章を型として身につける

- 暗誦文化は、型の文化である。型の文化は、強力な教育力を持っている。一度身につけてしまえば、生涯を支える力となる。日本語の感性を養うという観点から見れば、暗誦に優るものはない。最高のものを自分の身の内に染み込ませることによって、日本語の善し悪しが感覚としてわかるようになる。モーツァルトを聴くことで、音楽の質を感じとる感性が養われるように、最高級の日本語にはじめから出会う必要がある。
- 幼い頃に、できるだけ早い時期に最高級のものに出会う必要がある。意味がわかるのはあとからでもよい。たとえ意味がわからなくとも、その深みや魅力は伝わるものだ。よしんばそのときに魅力を感じなかったとしても、後年それを覚えたことに感謝する時が来る。また、それだけの魅力を持ったものが暗誦・朗誦される価値を持つ。
- モーツァルトのような最高の音楽を幼児や胎児にまで聴かせるのは常識になりつつある。絵においても、最高の名画を子どもの頃に見させるという考えも一般的だ。なぜ言葉に関してはそうはならないのか。小中学校の国語の教科書は、漢字の問題や内容理解の問題から、端的に言って、きわめて幼稚なものとなっている。漱石や鷗外も中学校の教科書から消えることとなった。その代わりに、マンガや現代のポップスが採り入れられたりしている。



●母国語の強い顎をつくる

- 内容をやさしくし、若い人々に迎合するような、このような変革に対して、私は断固反対である。硬いものを食べてこそ、顎は強くなる。強い顎があれば、硬いものも柔らかいものもかみ砕くことができるが、弱い顎では硬いものに含まれる栄養分を吸収することはできない。子ども時代は栄養摂取の面だけでなく、強い顎を形成すること自体が主なねらいとされるべきだ。
- すべての活動において基本になるのは母国語能力。基本的に母国語で思考する。母国語で明晰な思考ができないのに、外国語でそれができるといふことはありえない。
- 優れた日本語をリズムとして自分の身体に染み込ませていくと、その後には自分の潜在的な日本語力はアップしている。優れた日本語を身体に技化した人においては、日本語を評価する基準は高くなる。



●子どもは言葉のリズムを楽しむ

- 本当に質の高いものに幼い頃に触れる。そのことが、おそらく五十年後、六十年後になっても人生を豊かにしつづける。
- 暗誦すべきものを厳選し、子どもの場合はテンポよく、しかも間違いを気にすることなく毎日



日課として繰り返す。年少組から年長組まで日課として毎日数分間ずつでも繰り返されることによって、最高の日本語が生涯失われぬ技として身につく。

- 最高のものを型として反復練習し、自分の技として身につける。このことは、教育の基本である。生涯にわたって意味を甦しつづける豊かな文化を、身体に技として染み込ませるだけの意志の強さと迫力が、教師には求められる。

●ライフサイクルと暗誦文化

- 自我に目覚め、恋心やあこがれが沸き立つこの時期に、優れた詩に出会うことは、生涯の思い出にもなる。私自身、思春期に無性に暗誦をしたくなったときがある。



- 人は老いていく。老いることは必ずしも寂しいことばかりではないだろうが、やはり寂しさが伴うものであろう。老いていくなかで、ふと幼少の頃に覚えた言葉が口をついて出てくるといことがあれば、それは非常な喜びである。



私は七十代の方々のゼミを数年間担当していたことがあるが、その方々が子どもの頃に覚えた言葉を今でもすらすらと言えることに驚いた。そして、そうした言葉を朗誦しているときの、その方々の顔が喜びにあふれているのを目の当たりにした。

- 幼少の頃と老年の現在の自分とが言葉によって結びつけられている。これはまさに人生が一つの円環サイクルをなしていることにほかならない。ライフサイクルは、暗誦文化によって現実のものとなっている。幼少の頃の自分が数十年の時を隔てても、自分の中に生きつづけていると感じられることは、人生を貫き流れる川を自分の中に感じることもなる。

この一貫した流れの感覚は、自分の人生を肯定する力となる。

- 「日本語の宝石を身体に埋めておく」。年齢を重ねていく自分への贈り物として、日本語の宝石を身体に内在化させておく。



P199 ~ 209

<コメント>

20年前のベストセラー、齋藤孝先生を一躍国民的な国語の先生としてデビューさせた「声に出して読みたい日本語」。暗誦・朗誦の文化的価値を本書ほど具体的に示してくれた本はない。歴史の中で吟味され生き抜いた名文を本書で味わいながら、今度は自分版の「声を出して読みたい日本語と英語」を読書を、しながら書き写すことをおすすめしたい。

2021年9月29日(水)林明夫

<提案>

- (1)10月1日から開倫塾のすべての授業に音読と暗誦(暗唱)を入れよう
- (2)毎日の「家庭学習」と「開倫塾での自学自習」に音読と暗誦(暗唱)を入れることを塾生に推奨しよう
- (3)本や新聞・雑誌を読んでいて、素晴らしい文章や表現に出会ったら、「書き抜き読書ノート」に書き写し、「音読」と「暗誦(暗唱)」に励み、自分自身の「声を出したい日本語・英語の小冊子」を作り、自分の「宝物」にしよう

2021年9月30日(木)8:30

FCCJ(日本外国特派員協会)にて

林明夫